

—追悼—

風のように翔け抜けた科学者

—田中捷雄さん追悼—

小 田 稔*

田中さんは、ご葬儀の時に古在会長が言われたように、科学者一生分以上の仕事をして、若くして逝ってしまっ

た。何時が田中さんとの最初の出会いだっか正確には覚えていない。前々回の太陽活動期の終わり頃、1970年頃に高倉さん、西村純さんと一緒に気球を使って、太陽面上のX線フレアの位置をきめようとしたことがある。気球が僅か数時間飛んでいる間にフレアが起きる事を期待するのも厚かましい話だが、運の良いことに本当にフレアにぶつかった。活動期の終わり頃だったので、これが次の活動期まで唯一のX線フレアの位置ぎめのデータになった。これに味をしめて、宇宙研の天文衛星第一号ASTRO-Aを次の活動期1980年頃に合わせて、太陽X線衛星にしようと思立って、高倉さんに相談したのが飛騨の高山での天文学会のとときだった。

私の積もりとしては、勿論私ひとりの勝手になることではないが、天文衛星を一つ太陽物理に差し上げましょう位の気持ちだった。そのためには、太陽物理を代表して人工衛星のあらゆる汚れ仕事にもどっぷり浸かってくださる方が欲しかったのだが、その感じが天文台の皆さんにはなかなか分かって戴けなかったようだった。そのうちに衛星の準備だけは宇宙研の田中靖郎さんを衛星全体の主任として進んでいった。紆余曲折の末、結局田中捷雄さんが太陽観測を統括する人として現れたのだったと思う。輝くような若武者がさっそうと現れたという印象を覚えている。

本格的な科学衛星の前に工学試験衛星を上げることになるのだが、そのMS-T4に田中捷雄さんの構想になるX線のブラッグスペクトロメータが載った。常識的には結晶を動かしてスペクトルをとることになるのだが、小さな衛星の上でそれをやるのは当時の技術では並み大抵のことではなかった。第一、重さと電力を捻り出さなければならぬ。それにお金もかかる。

田中捷雄さんは衛星の回転軸を太陽の中心から少しオフセットして、もし太陽面上にX線フレアが出現すれば、衛星に固定されたブラッグ結晶の軸が実質的にはこのX線源をスキャンすることになると考えた。簡単なことのようにだが、コロンブスの卵だった。この試験衛星で既にいくつかのX線フレアのスペクトルが得られた。

そして、1981年2月21日日本番の科学衛星が打ち上げられた。科学衛星は、軌道にのるとそれまでの無粋な記号を捨ててニックネームを名のる。この衛星はすぐ「ひのとり」と名付けられた。それまで、「でんば」、「たい

よう」、「はくちょう」といった、どちらかと言えば硬い漢語の名前になれていた私達はこの柔らかい呼び名におやっと思ったが、すぐこれは素晴らしい名前だと思うようになった。真相は知らないが、奥様との合作による命名だと聞いた。お二人が子供に名をおつけになるような気持ちだったかと想像する。

「ひのとり」にはこのX線スペクトロメータとX線フレアの像を描くすだれコリメータとが積まれていた。時期は活動の極大期は過ぎていたかと思ったが、活動末期に大きなフレアが起きるといことなのか、「ひのとり」は次々に訪れる大フレアを相手に奮闘したのである。

その頃私はNHKに頼まれて、半年間宇宙物理学をテーマとして、市民大学を担当した。毎回45分間、それぞれのテーマに応じて相棒を選んで対談したり、話の一部を分担して頂いたりした。その第24回に、田中さんに太陽活動の講義をしてもらい、小杉さんがX線像の映画を作ってその話をした。田中さんの話は緻密に準備された見事な講義だった。逝去されてから、またそのビデオを見た。7年程たった今日でも、ことに間もなく次の太陽観測衛星の打ち上げをひかえて、素晴らしい講義だと思う。ただし、今みると気のせいかに既にお顔の色が悪いように見える。

実はその後、何の用だったかラホヤにいて、ヒュー・ハドソンさんと一緒にパサデナにジリンさんを訪ねたことがある。その時に初めて田中さんの病気の“可能性”を聞いた。その事に愕然とするともに、話の間に伺えるジリンさんの田中さんにたいする深い信頼と友情に感動したものである。後に、太陽活動衛星SOLAR-Aの準備のためにアメリカからも多くの人々が来るようになった。その何人かから渋谷のある飲み屋にいった事がある。皆が心の底から田中さんの健康を心配していた。

その後、ひどく顔色も悪くなり、体力も衰えたが、田中さんは氣力をふりしぼって論文も書き、次の活動期にむけての準備もされた。何度か太陽屋さん達の集まりでお見かけした奥様が明るく振舞っておられる事と併せて、見ているのが辛かった。

そう言っても慰めにはならないが、田中さんは若くして大きな業績を残し、日本の仲間にも、ジリンはじめ外国の友人達にも深く敬愛された。そして、驚くべき氣力をふりしぼって次の活動期にたいする準備に手をそめていた。おそらく、病気になる前から、信じられないほど大きな人間に成長されたのだろう。昨年9月18日天文台で日江井さん、桜井さんと一緒に進められた仕事の話詳しく聞き、実験室を見せて頂いたのがお会いした最後だった。

田中捷雄さん、さようなら。

* 理研 Minoru Oda: A scientist who soared away through the air.